

放射線科、IVR科

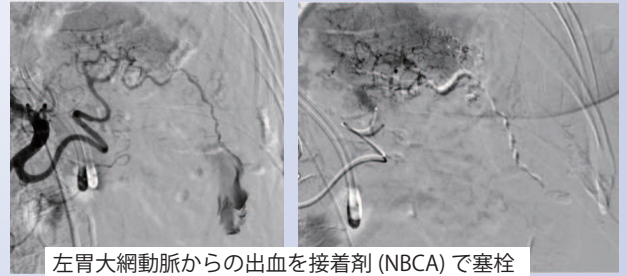
部長 平田 雅昭



放射線科は画像検査を通じて他科を支援する“Doctor for Doctor”という側面が強い部門です。Interventional Radiology (IVR) の領域も同様で、頭から足の先まであらゆる臓器を扱うため、いろいろな診療科と協力しながら積極的に診療に携わっています。腫瘍、止血、動脈瘤、門脈圧亢進症、膿瘍など扱う病態も様々です。近年は、循環器内科、脳神経外科の手技のお手伝いもさせていただいています。

今回の導入にあたっては、3診療科の手技すべてのワークフローが改善されるように細部にこだわりました。特に既存の画像データに清潔操作で術中にスムーズにアクセスできることに注力し独自にタブレット端末を採用しています。新装置の性能は14年稼働した旧装置とはすべての面で隔世の感があります。回転撮影からの画像再構成は極めて早く、術者が直接その画像を確認操作し診療に活かせるようにインターフェイスは工夫されています。

この最新のハードをとことん使いこなし、さらに質の高い医療を患者さんに提供してまいります。



左胃大網動脈からの出血を接着剤 (NBCA) で塞栓

放射線部

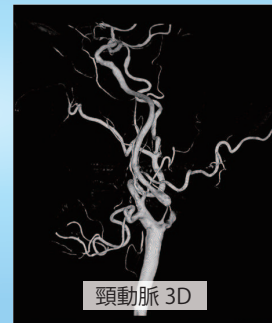
徳丸 直起



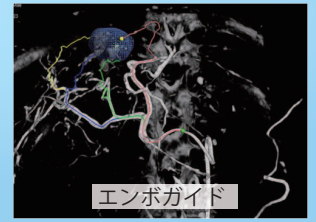
バイプレーンにより検査時間の短縮と造影剤の減量が可能になったことに加え、最高品質のX線管と高効率の検出器により低線量での高画質画像が実現しました。

また高機能なワークステーションにより、肝細胞がんに対する肝動脈化学塞栓療法 (transcatheter arterial chemoembolization: TACE) で使われるエンボガイドでは、カテーテル先端から腫瘍までの血管の道筋を3D表示することができ、手技中の血管選択に役立っています。

今後の展望としては脳外科領域の治療が増えてくると見込まれますので、術前検査から術後のフォローまで放射線領域の各モダリティと連携して詳細な検査データを提供していきたいと考えております。



頸動脈 3D



エンボガイド

看護部

野元 樹理



インターベンションルームでの治療や処置には多職種のスタッフが関わっていますが、看護においては主に特殊検査室の看護師が担当しています。

今回の改修に伴い部屋の面積も広がり、高い天井に改装されました。壁面は汚れても拭き取れる機能的なボードとなっており、衛生面にも配慮しています。窓がなくても明るく、クリーム色を基調とした壁で、開放的な印象の部屋になったと思います。

また、治療は同じ姿勢で長時間に及ぶ場合が多いです。沢山の機材やモニター音などが更に患者さんの不安感や緊張感を高めてしまいます。そのような状態において、少しでも安心感が得られるように、患者さんが横になった際に見上げる天井面は、暖かみのある木目調デザインを提案しました。気持ちや和らぐ空間に感じていただけると嬉しいです。

長時間、緊急度の高い治療においても安心・安全・適切に、関わるスタッフと密に連携を取りながら、患者さんにやさしい医療をご提供できるようにこれからもより一層励んでまいります。



明るい雰囲気の内と特殊検査室スタッフ
ぜひ一緒に働きましょう♡

「任せてよかった」のために

「いい部屋になるように一生懸命、頑張らせていただきます。『任せてよかった』と施主さんに言ってもらうことが何よりの喜びです。」これは、初対面の日の現場監督さんの言葉です。プロフェッショナルとしての仕事に対する姿勢が現れた素敵な言葉だと思いました。

部門間の垣根が低く、お互いに気軽に話ができることは当院のよい特徴の一つと考えています。この風通しの良さにより、自分の部門で慣れないことは気軽に尋ねることができ、逆もまたしかりです。我々には協力して技術を高め合う環境があります。改修にあたっては、仲良く、しっかり話し合い、細部までとことん機能的にデザインしました。工事関係の方々にはプロとして我々のデザインを丁寧に具現化してくださいました。

今後この部屋で行われる手技が患者さんにどれほど恩恵をもたらすことができるかは、この部屋を使う我々によって決まります。患者さんに「任せてよかった」と言っていたらいいように各科医師、看護師、放射線技師が連携し、心機一転、日々研鑽に励んでいます。我々もプロフェッショナルとして、さらに良い医療提供につなげていきたいと思っております。 インターベンションチーム一同



多職種からなるインターベンションチーム